

MGF は、☑神第一主義、☑キリスト中心主義、☑聖霊主導主義の教会

礼拝黙想 Meditating on Worship

「神を愛することは最高の美德であり、神に愛されることは最高の祝福だ。」

A 「あなたは私の心を奪った。私の妹、花嫁よ。あなたは私の心を奪った。ただ一度のまなざしと、首飾りのただ一つの宝石で。」(雅歌4:9)

「愛と恋の違いとは？」キリストが導いたその正解日本人は「愛」本来の意味を誤解していた

佐藤 優：作家・元外務省主任分析官

「恋」と、「愛」は、何が違うのでしょうか。恋のほうはわかりやすいかもしれませんね。相手を見たらドキドキする。思わず相手を目で追ってしまう。話をすると手に汗をかいたり、赤面してしまう。ひどくなると何をしているときも、相手のことを考えずにはいられなくなる。

とても強くひかれていているわけですから、当然のこととして、なんとかして相手に近づき、自分に關心を持ってもらいたいと思うようになります。

もしうまくつき合えたら、自分だけを見てほしいという気持ちが高まり、相手を独占したくなる。自分の期待にこたえてくれないければ、激しく落ち込んだり、ときには相手を憎んだり攻撃したり…。もしふられそうになれば、相手をしつこく追いかけて困らせる。

好きな気持ちから始まった恋も、次第に、わがままとわがままのぶつかり合いになることはよくあります。このように自己中心的なものは「恋」であっても、「愛」ではありません。

「愛」とはなにか？

では、「愛」とはなんでしょう？ キリスト教でいうところの「愛」は、ギリシア語で「アガペー」と言います。アガペーとは、神が人をいつくしむような、無償の愛のことです。

無償の愛とは、見返りを求めず、ただただ、その人の幸福を願うという気持ちで

す。この愛は、親が子どもに与える愛に似ています。親が生まれてきた子をいつくしむのは、なにか見返りを求める気持ちがあるからではありません。

ただひたすらいとしくて、この子を大切にしたいという気持ちからです。子どものためなら、自己犠牲も惜しみません。

ところで、16世紀にヨーロッパから日本にキリスト教を伝えに来た宣教師は、聖書に出てくる「愛(アガペー)」にふさわしい日本語の訳し方に、たいへん苦労したようです。

当時の日本では、「愛」の字は、仏教における「愛欲」「愛着」の意味で使われることが多く、欲望や執着といった煩惱をイメージさせる言葉でした。愛欲や愛着というのは自己中心的なものであり、「見返りを求めない愛」とは、まるで真逆です。

そこで宣教師は、日本語でもっとも近い言葉として「御大切」という言葉を当てました。相手をただただ大切に思う気持ち。大事にしたいという気持ち。この訳し方のほうが、キリスト教における「愛」のことを、日本人として理解しやすいかもしれません。ちなみに、ギリシア語には「愛」を表現する言葉がほかにもあり、アガペーのほかに、「エロース」だったり、「フィリア」だったりがあります。

「エロース」は、日本語では、性愛と訳されます。自分にないもの、不足しているものに憧れ、求める気持ちのことを言います。男性と女性が惹かれ合うのは、まさにこのエロースです。

持っていないものを強く求めるという意味においては、お金持ちになりたいとか、いい大学に入って尊敬されたいと考えるのも、広い意味では、「エロース」の力が働いています。

もう一つの「フィリア」は、友愛と訳されます。これは、友達を信頼し、大切に思う気持ちです。ほかにも、同じサークルの仲間や地域の仲間などの間で生まれる信頼関係も、フィリアと言えてでしょう。

愛には、このようにいろいろな形があると、古代のギリシア哲学では考えられて

いました。

隣人だけでなく、敵まで愛せ

さて、キリスト教における「愛」の話に戻りましょう。新約聖書は、神の愛(アガペー)にならって、人間もまた、「無償の愛」を隣人に実践するように求めています。「隣人を自分のように愛しなさい」ですね。

イエスは、さらにその愛の実践を、このように言っています。

「敵を愛し、自分を迫害する者のために祈りなさい。」(マタイによる福音書 5.44)

隣人どころか、自分の敵まで愛せ、と言うのです。自分を陥れてくるような敵を、あなたははたして愛することができますか？ なかなかできませんよね。

ところが、それを実践して見せたのが、イエス・キリストです。イエスは十字架にはりつけにされ、自分が痛みを苦しんでいるというときに、自分を迫害した人々を、呪うどころか、その罪を赦してくれるように神に祈るのです。

「父よ、彼らをお赦しください。自分が何をしているのか知らないのです。」(ルカによる福音書 22.34)

自分を迫害し、殺そうとしている人たちのために祈るのですから、これこそまさに、究極の愛です。

愛がなければすべてが「無」に等しい

このようにキリスト教では、愛の実践こそがすべてなのです。

「たとえ、人々の異言、天使たちの異言を語ろうとも、愛がなければ、わたしは騒がしいどら、やかましいシンバル。たとえ、預言する賜物を持ち、あらゆる神秘とあらゆる知識に通じていようとも、たとえ、山を動かすほどの完全な信仰を持っていようとも、愛がなければ、無に等しい。全財産を貧しい人々のために使い尽くそうとも、誇ろうとしてわが身を死に引き渡そうとも、愛がなければ、わたしに何の益もない。」(コリントの信徒への手紙 I

13.1-3)

新約聖書のなかの、パウロの言葉です。どんな知識も、どんな信仰も、どんな財産も、そこに愛がともっていないければ、まったく無に等しいのです。

パウロは続けます。

「愛は忍耐強い。愛は情け深い。ねたまない。(中略)自分の利益を求めず、いらだたず、恨みを抱かない。不義を喜ばず、真実を喜ぶ。すべてを忍び、すべてを信じ、すべてを望み、すべてに耐える。」(コリントの信徒への手紙 I.13-4.7)

日常のなかで愛を実践するとき、ぜひ、この言葉を思い出してみてください。

信じても苦しい人へ 神から始まる新しい「自分」第 18 回 聖書が教える神の愛とは？(中村穰)

神様の愛と他の愛の違いは何でしょうか。プラトンは、「私はあなたを愛している。私にはあなたが欠けている。私はあなたが欲しい」と、愛を恋人同士の恋愛の「エロス」として描いています。

これは、自分が好きな部分を持つ相手を好きになる愛です。アリストテレスは、「私はあなたを愛している。あなたが私の喜びです。そのことが私には嬉しい」と、愛を人間同士の友情の「フィレオー」として描きます。これは大切に思う人に同情したり、助けようとしたりする愛です。

これらの愛には限界があります。恋愛や友情は同じ価値観の下に成り立つものです。もし相手が浮気したり、裏切ったりすると壊れてしまいます。

シモーヌ・ヴェイユは愛を、「私はあなたを無に等しい私のように愛している。神様が私たちを愛するように、あなたを愛している。私は私の力をあなたの弱さのために発揮し、私のささやかな力をあなたのために発揮しよう」と、神様の「アガペー」の愛として描いています。

この神様の愛を示す「アガペー」の愛は、自分を放棄する愛です。私たちは本当に神様の愛を受け取っているのでしょうか。イエス様の愛を受け取ることの真の意味は、愛を自分の心にしまい込むのではなく、自分が崩壊し、他者のためにある自分(与える自分)であることを受け入れることです(レヴィナス)。

私が愛されるとき、私は愛を受け渡す存在となるのです。愛されるだけでは、神様の愛は完全な形であらわされていません。

イエス様のへりくだりの愛を一番にあらわしているのは、クリスマスです。これまでの話を踏まえるならば、クリスマスは“私のため”で終わらないはずで、私の隣にいるだれかのためにクリスマスはあるのです。

神様の愛を受け取るとき、主語が「私」ではなく、「神様」になるはずで、そこに愛の自由があります。主語が「私」のままだと、神様より、「私」が愛されることを求めてしまいます。愛されることを求めていると、その先には愛される・愛されないとの比較が必ず生まれ、不安が付きまといきます。

聖なる神様の愛を受けるとき、私たちはこの比較からも解放され、神の家族として招き入れられることを知るので、そして神の家族として、神様の愛を放つ者とされていくのです。これが本当のクリスマスの意味です。

また、クリスマスは、一番愛するひとり子を、三十三年半後にどうなるかを知ったうえでこの地上に送ってくださった、父なる神の犠牲の愛があらわされた時です。

ですから十字架の上にあっても、イエス様は見捨てられていません。父なる神様はその痛みがあるところで、イエス様と共にいられたからです。愛する者が目の前で苦しんでいる。身代わりになれるならと、何度思ったことでしょうか。

シモーヌ・ヴェイユが『超自然的認識』(頸草書房)の中で、神様にとってクリスマスは、聖金曜日と同じくらい悲痛な祭日だろうと言っています。私たちを愛する父なる神様は、その苦しみをも背負ってくださったのです。そして、最後まで父の愛を信頼しきった子なるイエス様の従順な信仰があります。

この愛の関係が私を救い、私は神の家族となったのです。そして、今度は私がその愛を伝える番です。クリスマスは私で終わらない、終わらせてはいけません。苦しみの中にある人のところに、暗闇を照らす一点の光が発揮されたわけです。ここに神様の自分を放棄する愛があります。

「犠牲は、神へのささげものである。神に捧げることは、破壊することである。だから、人は、神は創造することによって、権利を放棄したと考え、破壊することによって、神に権利を回復させるのである。」(シモーヌ・ヴェイユ『超自然的認識』)

私たちは人を愛するときに限界を感じます。愛が溢れていたと思っても、すぐに乾いてしまいます。しかし、神様の愛は永遠です。乾くことのない水です。川には伏流水というものがあるのをご存じですか。伏流水とは、川底の下にある水脈です。

干上がっているように見える川でも、石や砂利の下には水脈を保つために細く流れる伏流水があります。神様の愛も同じです。私の心が乾ききったと思っても、伏流水のように神様の愛は涸れることがなく、私たちの心に流れているのです。その愛は私を溶かし、愛するための自分へと変えられていくのです。

あなたは愛されるために生まれてはいません。愛するために生まれているのです。

Ω

<お知らせ Announcement>

★10月15日(日) 午後にキッズイベントがあります。

MGF はキリスト狂徒の集まるキリスト狂会

「教会 [マラナサ・グレイス・フェローシップ (略称: MGF)] はキリストのからだであり、すべてのものをすべてのもので満たす方が満ちておられるところです」(エペソ 1: 23)。「あなたがた [MGF] は、キリストにあって満たされているのです。キリストはすべての支配と権威のかしらです」(コロサイ 2: 10)。